



創世記2-3章

【R指定】エデンの園の解釈

創世記2章から4章の中で、生き物になって食べ物を与えられて、子どもの話があつてということで、食べる話…食べて良い、食べてはいけないという話と、子どもが生まれる生まれないという話が交差しているように話が進んでいきますので、ちょっとわかりにくいかなと思います。

「生めよ増えよ、地を満たせ、地を従えよ。」と神様が命令をしてくださるわけです。それは神様に似たものだと。神様は生ける神様ですから、人間は生けるものでなければいけない。生けるものと言ったときに、2つの側面があります。生き物というように言われているように、生きるものということと、増える、子を生み続けるという意味の生きる。

生きているということは、「生めよ増えよ」は、人に言われただけではないですね。生き物にも言われています。被造物を見ればわかるように、生き物というものは、自分の食べ物の話と、子孫が残る話と、その2つしか人生に無いみたいな感じでしょ。植物もそうですよね。植物も雌しべ・雄しべがあつて、その種が実を結んでいくという話と、太陽はどっちかなと言つて食べている感じですよ。その2つですけど、特に生き物は、自分の生きるために食べる。そして、続くために生むというこの2つが「生きる」ということに入っていると思います。

生きるためには、食べるのです。だから食べ物なのです。子を生むためには、男と女が知る。ひとつになるということが、その元になっています。食べる話は、造られたときに、教えられなくても食べますね。口に入れると言われなくても口に入れるものだと思います。男と女も大人になれば、それはわかる。教えられなくてもわかります。少なくとも動物を見ているのでわかります。イスラエルは羊飼いが職業として普通でしたね。羊は家に普通にいたわけですから、羊が何をしているか皆は見えていますから、子供のときから知っているはず。それは、そうとして…大人になればわかります。

1章から4章までの中に、暗示されているところがあると思います。「ひとつになります。父と母を離れて一体となります」という話があるのですが、その前の箇所、造られたところ。神様が造りました。あばら骨を取つて、そこから女を造りましたと訳されています。そのあばら骨とは何でしょうということ、皆はそうなのかな？と思つているかもしれません。あばら骨という場所の骨のことを言っているのではなくて、「端っこの骨」ということばのようです。「端っこの骨」と言っているの、何かどこかの翻訳で、あばら骨になったようなのですが、端っこの骨というのは、どこの骨かという、「陰茎骨」と言われる骨。哺乳類には普通は陰茎骨があるそうですが、人には無い。無い哺乳類もあるようですが、人には特にその骨がない。それは、取られたからかなということ言う人もいますが、そうかもしれません。その陰茎骨を取つて、そこから女を造りました。人を深く眠らせて、ある意味で死んでよみがえつて、女を取られたということなのですが、陰茎骨から造つたということであれば、死んでよみがえつたのを表すように、割礼も連想するような箇所なのだろうと思います。

裸だけれども、恥ずかしいと思わなかった。恥ずかしいと思わなかったかどうかはわからないですが、裸だけれども、恥とはしていないということは、まだ、人と妻は関係を持っていません。その時に、ヘビが現れた。夫婦の関係を持つ前に、まだ子ど

も、試されていないときに、ヘビが来ました。ヘビが来て、「食べ物を取って食べるな、善悪の知識の木の実を取って食べるな」と言われて、「見ると目に美しく食べるのに良い」ものだった。目に美しく良いというのは、セツの子孫が神の子らを見て言っているような言い方も同じような言い方です。食べ物を見るときと、女を見るときが同じような目。食欲と性欲。これが、生き物の2大欲です。それで、食欲の話をして、食べたなら、目が開いて大人になったわけです。

それで、自分たちの裸であることをわかったので、いちじくの葉をつづり合わせたと言っていますけれど、私の解釈では、4章の最初に、「人はその妻エバを知った」と言っているこの「知った」のは、追い出された後ではなくて、「二人の目が開いて自分たちの裸を知った」という、この時にすでに関係があつて、その子どもがカインということかなというように思います。大人の男女が目が開いて裸だと知ったという言い方をすれば、関係を持ちましたということになるでしょう。

それですから、いちじくの葉でその部所を隠すということになります。いちじくという実は、形が男性の袋に似ています。中は花なのですけれど、種がたくさん入っているようなもの。その自分たちの種を隠す、神様に取りられないように隠すという意味もあるかと思えます。それで、わざわざいちじくという果物の名前が言われていると思えます。善悪の知識の木の実がいちじくではないですよ。でも、いちじくのようなものだったということも言えると思えます。種を取られないように隠すという意味がここにあるかなと。それで、関係を持ってしまいましたので、裸だということを言った。食べるなというものを食べたということで、この2つです。生きる話と生む話がどちらも反対側の方に行ってしまったわけです。

死ぬ、そして不妊になるという、裸と恥の逆側のほうにいてしまいましたので、女について言われるときは、苦しんで生む。男について言われるときは、苦しんで食を得る。ということで、女は苦しんで生む、男は苦しんで食べるという2つの約束もここに子どもの話と食べる話というように書かれていると思われます。

ですから、善悪を知る者になったというときに、取って食べるということと、神様を信じない悪側に立って妻を知る。汚れている関係になってしまったということ。飲み食いと不品行はいつも一緒に出てきます。飲み食い、むさぼりと情欲。欲望と情欲、それが、偶像礼拝。その欲望と情欲についてローマ人への手紙1章でずっと話していますよね。そのことは、この3章からのところに、ずっと書かれているものだと思います。

妻を知るという言い方をしますけれど、女性と男性が関係を持つときに、美味しそうなので食べるという言い方をしますけれど、聖書の中には無かったような気がします。女性の性器の形は唇みたいな形をしているという意味でも、食べるということと性的な関係を持つということが平行しているものかなと。もともと取られた場所と1つになるということですから、骨の話もそれを表しているということだと思います。

生きるということを曲がって求める時に、欲望に満たされる食欲と性欲ということに表れてしまって…ソドムとゴモロとか、まったくこの食欲・性欲が、それのかたまりの場所になってしまっている感じですよ。そのことでも表され、ローマのところで新しい時代が来るときにも、それが取り扱われているということが言えると思えます。食べることとひとつになることということが、新しい時代にも言われています。私たちは、キリストを食べて主とひとつになるというのが、聖餐式においても言われているところです。